

花が心に関与する

浅野 房世

兵庫県立大学、兵庫県淡路景観園芸学校教授。専門は園芸療法。日本ではまだ数少ない園芸療法の専門家として、日本の園芸療法および、震災以後の兵庫県での園芸療法関連事業を牽引してきた方である。なお、今回のシンポジウムは兵庫県立淡路景観園芸学校との共催で行なった。

ご紹介いただきました浅野です。どうぞよろしくお願います。最初に、少し園芸療法の概念をご説明し、続いて症例の報告をいたします。私には、花というものが心にどう関与するかというテーマが与えられました。そこで今日は、それにいちばんびつたりくる症例の方に許可をいただいて、資料を持ってまいりました。

まず園芸療法の概念をお話しします。みなさんもご存じのように、いのちの源は、地球の海水のなかにありました。そこに、何かのきっかけによって水中で光合成をする植物ができて、やがてそれが陸に上がり、昆虫や動物が生まれました。その進化は、私たちのDNAの中にきちっと記されています。これが園芸療法とどう関係するのかわかるかと思われかもしれませんが、インプリンティングされているこの進化の歴史をいかに活用して、クライアアントが生きられる空間、生きられる時

間を獲得できるかというところに、園芸療法の醍醐味はあります。園芸療法という名称は、ホーティカルチャル・セラピー (Horticultural Therapy) の日本における正確な訳語ですが、皆さまによりよく理解していただくためには、プランツ・アシステッド・セラピー (Plants Assisted Therapy)、「植物介在療法」という名称のほうがよりふさわしいのではないかと思います。今日はそのような視点でお話しいたします。また、私はセラピストの養成に携わっているのですが、学校に入つてすぐの学生は、「認知症の高齢者に効く植物は何か」とか、「うつにめざましくいハープは何か」というような質問をします。それが一年たつと、そういう質問をしなくなりません。それがなぜなのかということも、今日のお話で少しご理解いただけたらと思います。

まず、ポルトガルにあるゴシック建築の教会の写真をご覧ください。天井から光が入るようになっていきます。人は神に祈るときに頭を下げるのですが、頭の上に光があることを意識しながら、頭(こうべ)を垂れて神に祈るわけですね。実は、森の中の光が抜けてくる場所に向かう形が、教会の神に祈るといふ形の原形になったと言われております。

私は癒しの空間をどう作るかということを、長い間研究してきました。植物による癒しには、植物を鑑賞するという感覚を働かせて癒しを得ることと、植物を育てるといふアクティブな状況から癒しを得ることという、二つの傾向があります。たとえば、森林の中を散歩するという行為。散歩では、樹木にかこまれて、そのにおいや鳥の声などを感じることで、癒され

ていくわけです。一方、ブームにもなっているガーデンングでは、植物を育てる、あるいは刈り取る、そういうことを通じて癒しを得ていきます。「今日は関わって癒されよう」、あるいは「今日は眺めて癒されるんだ」と決めてから植物に関わっているわけではありませんが、無意識のうちに、あるときは受動的に、あるときは能動的に植物との関係性を構築しながら、人は魂というものを癒していくわけです。

ミリュー・セラピー (Milieu Therapy) といういい方があります。ミリューというのはフランス語で、環境という意味で使っています。英語のエンバイロメント (environment) よりも広い意味があります。人間の内なる自然と、人間を取り囲む外なる自然との関係のフアジーな部分をどうつないでいくかということ、このニュアンスのあるミリューという言葉を使って表現しています。ミリューには、園芸療法の場合でしたら患者を包み込む癒しの空間 (ヒーリング・スペース)、私たちがのようなクライアントをサポートする人間 (サポーターティブ・ピープル)、そして回復を助ける植物 (アダプティブ・ツール) が含まれます。

先ほど申し上げたように、学生たちは最初は私に「認知症の高齢者の回想法に効く植物は何か」とか、「鬱を改善させるための香りのよいハーブは何か」とか、あるいは「ラベンダーを使えばいいのか」というような質問します。でも、そういうことではないのです。その一人一人のクライアントにどのようなアダプティブ・プランツが必要なのかということを考えて、それをクライアントに提供していく。そして時間経過とともに

に、魂のケア、スピリチュアル・ケアが構築されていく。これが園芸療法の構図です。

園芸療法というと、寝ている患者さんのベッドの横にスコップを持って行って、「さあ、植物を植えましょう」というようなイメージをお持ちかもしれませんが、でもそうではなくて、どうクライアントの心の扉を開いていくかというところに、園芸療法の最も面白い部分があります。そういう視点で、ある症例の四カ月を、振り返ってみたいと思います。

クライアントは四〇歳の女性です。お母さんの突然の死のショックにより、過呼吸、失神などの症状を発症しました。半年ほど入院して一旦退院しましたが、二ヶ月後に再入院となりました。私たちはクライアントと園芸療法を始めるにあたって、最初の面接のときに一二枚の風景のカードをお見せして会話を成立させていきます。この方は、「植物を介在させるとお母さんを思い出さず嫌」とおっしゃいました。特に、お母さんは押し花をしていたので嫌だと。ところが、嫌だと言いながら、一二枚の風景に関して一枚ずつの思いを四〇分かけて語られて、最後は「今日は楽しかった」と言って診察室を出ていかれました。これは表現準備段階、つまりクライアントは何か発露したい状況にあるのだと私たちは判断いたしました。

それから、その面接が終わってすぐあと、セッシヨンのない日に暗い廊下でこの人に声を掛けられました。雨が降っている日でした。桜が満開だったんですけれども、「桜の花びら

が雨に濡れていきます。これはとてももったいない。何かに使えないでしょうか」と言われました。私は「分かりました。それをみんな考えていきましょう」と答えました。私はちよと別のセッションがありましたので、アシスタントが中心となって、第一回目のプログラムの準備をしました。桜の花びらを、紅茶を入れる不織布のようなネットに入れて、絵を描いてもらうことにしました。クライアントの声なき声を読むために、二〇枚の画用紙を台紙として用意し、その都度、その人の気分にあつた紙を使ってもらうようにしました。そして、消しゴムを削って印をつくって、二四色の絵の具を用いて落款しました。

次の回にはハナミズキの花で描きました。次はビオラ。クライアントは台紙を選ぶときに、「防波堤の中に魚が泳いでいるようなイメージで描いたんだ」とおっしゃっています。このとき、実は担当医が移籍することをクライアントに話しておりまして、非常に動揺していました。その葛藤が表現されています。次は「どうしても色が出ない」と言いながらつくった雨の日のツツジ。それから、驚いた感覚を出したかったんだと言って、斜めに張った白のツツジの絵。アヤメをつかったときに、初めて「包み込まれたい」という思いを言葉にします。鳥の絵を描いたときには「担当医のところに飛んでいきたい」というイメージで描いたと言われました。ヤツガシラをつかったときは、ヤツガシラの花を台紙の上に置いて石でトントンと打ち込んで色を出して、そのままの形を押し花のような形でつくっていかれました。このときはヤツガ

シラ、バラ、野イチゴと三部作をつくって、三枚目の野イチゴで台紙をやぶり、限りなく広がっていくイメージを表現したかった、と説明しておられます。

こういうふうに見ていただきますと、絵を描いていくのから芸術療法と同じかと思われるかもしれません。でも、この三部作をつくったのが六月九日なんですけれども、この一カ月前にはアサガオとホウセンカとペゴニアを植えています。この間ずっと、植物の観察をしながら進めてまいりました。園芸療法がほかの療法と最も違うのは、植物の時間、生命の時間と、クライアントの生きられる時間とをチューニングすることです。感度の悪くなったというと語弊があるかもしれませんが、そういうレセプターをチューニングするのが、私たちの仕事だと考えています。植えたアサガオ、ホウセンカ、ペゴニアがどんどん大きくなっていくのを見て、「だんだんかわいくなってきた」とおっしゃっています。

この人の絵には、必ず二つの花が出てきます。「寄り添いたい」という気持があるんですね。最後のときに「いつも二つですね」と言いますと、「そうですね。やはり寂しくないように、いつも二輪描いていました」と言っていました。でも六月の終わりに描いたヤツガシラは一輪でした。大輪で描いています。ここで初めてアサガオが開花します。今回の方は違いますが、ホスピスなどで園芸療法を実施する場合は、必ず担当医に「あと何カ月ぐらい時間があるのか」ということを聞きます。そしてその終焉にきちっと合うように、植物を選びます。今回の場合は退院を想定しなければなりませんし

たので、ほぼ四カ月で一つのプログラムを終了しなければならぬというタスクがございました。アサガオの場合、六月末、七月早々にうまく咲くだろうかという心配があったので、早咲きアサガオというのを選びました。もつとパーツと咲いてほしかったのですが、可憐な姿で咲きました。この花をつかってアサガオを描いています。ペゴニアのほうも採取して、とっておいた雨水といっしょに鍋に入れて色を出して染め付けをしました。それを台紙に使って、もう一度アサガオを描きます。ペゴニアも描きます。このとき、ペゴニアの開花を見て、初めてすっかり意識しながら一輪一輪をしっかりと形で描きました。最後には展覧会をして、同室の人たちを呼んできて一つずつ説明しておりました。

この症例の方は、母親の死にショックを受け、母を思い出す花に近寄ることに恐怖を感じていました。しかし、何らかの形で自分を表現することを求めていました。私たちは、それを表現準備段階であろうと考えました。やがて母とは違う花の活用方法によって、自身の表現を始めました。その段階が熟すると、花を育て始めます。初めは絵を描くことだけに必死でしたが、私たちは絵を描くことによって扉を開き、園芸療法の植物時間にクライアントの生きられる時間をチューニングしていきました。私たちのセッションがないときでも、毎朝病室の患者を誘って花を見に行つて、かわいくなつたと言いながら、徐々に落ち着きを取り戻していきました。花を育てるプロセスのなかで、花の命に自己を投影することによって生きられる時間を見いだし、花を介在させることによつ

て生きられる空間を獲得しました。そういう一連の四カ月のプログラムのセッションを見ていただきました。

また後ほど、ディスカッションの時間に皆さんとお話しさせていただくと思いますが、園芸療法は植物を育てることが中心になるわけではありません。植物の命の時間を顕在化させて、クライアントの生きられる時間に合わせていき、社会の中での関係性を再構築させる。それが園芸療法の一歩面白い部分だと思っています。私が用意してきたお話は以上です。